

詩集

# 利勝

著 虹柳路川



MCMXVIII

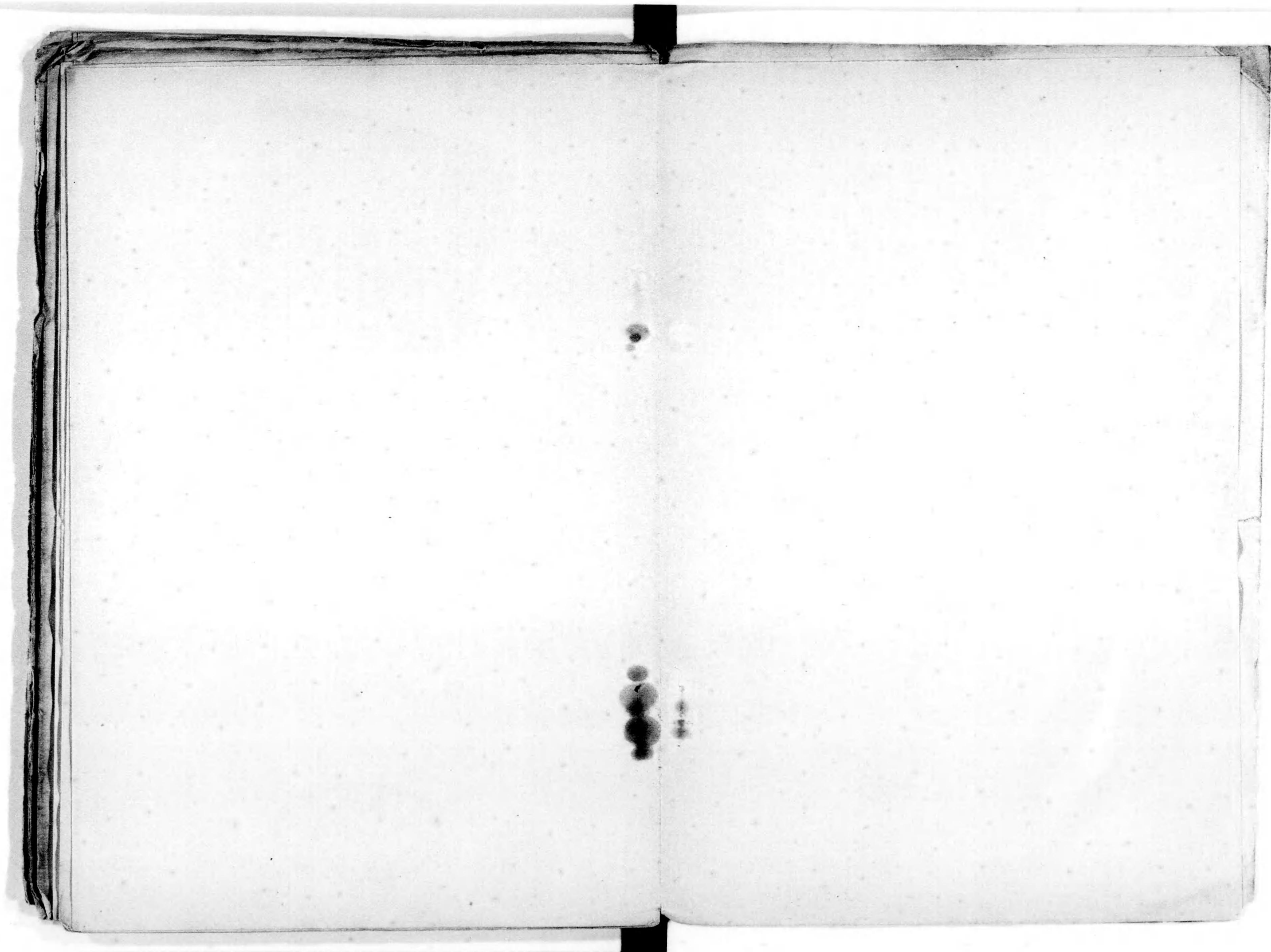
東京曙  
詩光社



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50

# 始





特102  
779



著 虹 柳 路 川

1914—1918

\*  
\* \*

MCMXVIII

京 東

社 詩 光 曙

發 行





題 扉

路は踏むものにあたへられ、  
鐘は撞くひさに答ふべし。  
知らず、われ、善きも悪しきも  
たゞ歌ふ、蒼海の揺らるゝ如く。

Je veux le glaive enfin qui taille  
Ma victoire, dans la bataille.

われは戦ひのなかいや果に  
わが勝利を薙り入るゝ鎌を欲す。

ゲエル  
アラン

勝  
利

耕  
人

千九百十四年より千九百十八年迄の  
詩を收む  
——著者

## 童話

路にある一本の樹木、その葉は黄金、  
その幹も黄金、その枝も梢も黄金、  
しかし春がきても秋がきても  
その花も咲かず、實も結ばず、  
たゞ風が緑に灰いろに  
その樹をめぐるばかりに年が経つた。

園丁が或る日不思議なその樹を見て

『さても美ごとな樹でありながら

花の咲かず實のならないのは

きつと培糞が足りないからであらう』と

さつそく土を掘り下げてそこへ培糞を積ん

だ。

さて、來年の春は美ごとな花が咲かうと。

やがて春になり、その葉の金の耀きは

空を煙らすばかりに眩しく輝き出した、

園丁が思つた、『これは尊い樹に違ひない、

花は咲かなくとも育て次第で實は出來やう、

黄金の實が出來るに違ひない、

園丁は寶物が手に入るやうに

やがて咲くその花を待つてゐた。

けれども、その葉の蔭には何ひとつ花らし

い影さへも見られない、

その間に夏がきてその葉は涼しい影を敷いた。



## 童話

もつと培養をやつてやらう』と、  
 そして丹青な心で秋を待ちもうけた。  
 けれどもその樹は依然として、實をつけな  
 いどころか  
 今度はその葉の光りさへ衰へたやうな氣が  
 した。

そこで園丁は腹だしく

『こんな莫迦々々しい樹があるものか』

人が折角丹青するのに、實も花もつけない

とは情ない、

こんな樹はみんな葉をむしつてやれ、

もう育てる必要があるものか』といきなり

その黄金の葉を一枚樹からもぎ取つた、

すると何たる奇蹟であらう、その樹は音を  
 出し、

身震ふまでその光りは園丁の眼を射つて

幹から明らかな言葉が出た。――

『摘みとれ、摘みとれ、永劫に摘みとれよ』と。

## 童話

耕人

## 耕人

土は固い、土は冷い、忠實<sup>まめ</sup>やかなの耕人よ、  
 きみの腕<sup>かひな</sup>のくだくるまで鋤をば奮ふ耕人よ、  
 空は銀色の黄昏<sup>たなご</sup>、鈍い柘榴<sup>ざいろう</sup>を滲ました日の  
 ひかり、  
 影かどばかり枯れた梢<sup>まじ</sup>も交る遠い森、  
 あゝ無窮<sup>むきゆう</sup>の果<sup>は</sup>までも肩をのばし、  
 その伸びやかな體軀<sup>たいく</sup>を横へた土よ、地平よ、

耕人

遮るものもない空に浮く鋤もつ人の姿、  
 「永遠」をこぼちゆく「時」のごとく、  
 しづかにおごそかに黙つた足どり。  
 土は固い、土は冷い、忠實<sup>まめ</sup>やかなの耕人よ、  
 きみの瞳はいつもたゞ地<sup>ち</sup>を映<sup>うつ</sup>す、  
 また日光と雨と霧とを、雲と虹と星とを窺  
 ひ見る、  
 けれどもきみの腕<sup>かひな</sup>はいつも地に下<sup>お</sup>りる、  
 黒いふかい土の上、また揺れる麥の上、

耕人

黄金こがねの穂の上、碧王あをだまの野菜のうへに、  
さながら珠玉しゆぎよくを覓めて海に下くだる人の如く。

土は固い、土は冷い、忠實まかやかめの耕人よ、

きみはよしないこの世の「理」ことわりを知る、

苦患くるしみを噛み、苦患に耐へ、さては鋤かひなふる腕  
の瘤こぶをば愛する、

きみの手は暗い畝のふちに泥を黄金こがねにかへ  
すまで、

青い葡萄を紫の酒に醸かすまで、土を踏む耕

耕人

人よ、

土は聖い、土は楽しい、女の肌より

あゝその土壤つちぐわいの下に絶えず流れる温い血の

音——きみの踏む足の下に

きみの腫に、きみの腕に、あゝきみの鋤も  
つゆゑに

苦患くるしみは愛となる、土は緑となる。

## 新月

白晝は彼方の國から帷帳を隔て、  
 その火と息づく光りを薄つらと投げてゐる、  
 もう日は落ちたのに影ならぬ影が  
 中空に輪を描き、樹立は一せいに  
 その青やかな白晝の調べを唱ひつづける。  
 薔薇色に濡れた空の裳裾は  
 ほのかな水淺黄の山にかくれて

たゆたひながらどこか伏し目に  
 さては物蔭を忍び出る『夜』の女の足どり、  
 吾は心ならずも読みさした書物を閉ぢて  
 開け放した窓に彼女を迎へる……  
 吾はなほも歌ふ青葉のそよぎ、その空の薔  
 薇色、  
 吾はなほ白晝に喘いで汗にまみれた額を  
 涼しく吹きおくる風に向けたいものを、と、  
 このとき、  
 吾の知らぬ空の隅から思ひもかけぬ光り

果物の汁のごとき新たな甘さが滴つた、  
 清らかな女の歩みが心にもそのやうに  
 さう、忘れてゐた空の奥から新しい月の面  
 が……。

## 焰

しづかな秋のまひるに  
 たひらかな野の上で藁塚が燃える、  
 紫の煙が空にほそくのぼり  
 かげらふがあたりにゆらめく。

地は大きな翼をやすめた鳥のやうに  
 音もなくよこたはる、そのうへの

燔

雨とふる日光、煙はさながら  
呼吸のごとくに土の裂け間から逃れる。

しづかな秋のまひるに  
たひらかな野の上で藁塚が燃える、  
燃える、燃える、だんくんと紅く濃もち  
虫のごとく地平を火は這ひまはる。

燔よ、しかし、しづかな  
音もなく立ちのぼる燔よ、

燔

なにもものにかひかれゆくごとくに  
痛ましくも喘ぎながら地にひれ伏す。

良き夜

## 良き夜

快く雨は土に匂へり、  
 九月の宵のふかみゆく草のかけ、  
 ひそかに祈りするものゝ如く  
 心こめたる肅ましき歌に  
 世界は蟲の響となる。

時計の音も静かな宵かな、

良き夜

われ足音を立てずとも  
 しだいに迫りくる空気は  
 なにものか力ある聲に囁き、  
 新しき果物の匂ひの  
 濕りたる土より息をはなてば  
 涼しき瞳は隠れたるところに笑へり。

われに軛をかくるものなし、  
 われに偽を教ゆるものなし、  
 風のきたればしづかに

夏夜

簷<sup>のき</sup>ばの風鈴は鳴るごとく、  
われあたへられたるものを正しく  
わが心のまゝに響かせむ。

快く、しづかに

雨は永遠の世に煙れり、  
われ灰色の衣<sup>ころも</sup>をぬぎすてゝ  
ねがはくばねちけたる微笑を  
わが神のまへにほごかむ。

## 忍 従

忍 従

友よ、わが慕はしき多くの生ける心よ、  
生の渦卷<sup>うずまき</sup>に向つて突進する、泳がんとする、  
乗り切らんとする  
苦しめる友よ、勇める友よ、  
落日<sup>りくじつ</sup>の空にきらめく塔の頂<sup>いただき</sup>の如く  
光れる心の、鋭<sup>と</sup>ぎすまされし心の  
美しくも崩れかゝる周圍に輝くかな、



## 忍従

隠忍せる友よ、微笑せる友よ、  
あゝわれはそこに云ひがたき疲労と、惱み  
と、

魂の儂き焦燥と、狂へる力の喘ぎとを見る、  
重なりかゝる朽葉の底に  
たえず頭をもたぐる若き芽のほひ……  
友よ、吾はすべての嘆く心を知る、  
吾はすべての訴を愛する、  
さらに、固く唇を結べる  
苦き無言の心を愛する。

## 忍従

吾は或る日路傍の犬にも劣り  
食を乞ふものごひよりも優らず、  
吾は水に撃たるゝ鳥の羽毛のごとく  
雨と泥に塗れて嘆く。  
吾は一銭の貯へなき時にも與へ、  
肉と脂を絞りて彼らに施せり、  
吾はわが歌聲の「求むる人」の心に生くべきを  
知る、

されど、吾に酬いらるゝものは  
常に嘲笑と、飢と、寒さとのみ、

忍従

友よ、かゝる苦き日を知れるおのおの心  
よ、生ける心よ、

吾は君の何ゆゑに歌ふかを  
また何ゆゑに笑ふかを  
なにゆゑに黙せるかを  
よく知る。

「時」は不斷の力、

忍従は「時」を越す階段、  
縛められたる腕の前に

忍従

友よ、微笑せん。  
すこやかに勇み立ち、  
墓と十字架とをのりこえて、のりこえて、  
吾はふとしもさし覗く不思議の泉、  
月の夜の水溜みづたまりよりも明るく、  
静かに燃えんとする欲念の  
おのおのの心に湧けるを、  
風の鳴れるを、  
草のなほも前方に向つて  
そよげるを。

生活

生活

おまへの腕うでを信せよ、  
焦立いらいだつ心のなかに。  
さうして嵐はらの晴間はらまに  
飛躍せよ。

祈禱

祈禱

吾にあたへよ、力を、  
吾にあたへよ、希望のぞみを、否  
吾にあたへよ、たゞ  
吾を信ずることろを。

苦患の日に

苦患の日に

おまへの力に絶えず

力を加へよ、

おまへの悲哀かなしみを

おまへの血で塗れ、

暴風あらしのおそふなかに

眠れよ、

そして、朝に

歌へよ。

苦患の日に

The sun descending in the west,  
The evening star does shine;  
The birds are silent in their nest,  
And I must seek for mine.

—W. Blake

日は西に沈み、  
星はきらめき出で、  
小鳥その巢に静まる。  
さて 吾れ吾が身を尋ねざる可らず。  
—ブレイク

## 地上頌歌

I 律

II 愛

III 想

1 序 曲

2 想 (I) (II)

J'ai gravi la montagne — ma vue tombe du  
ciel, La terre et le soleil sont la même patrie  
Mais la terre est mon doux sujet de frénésie.  
Au gré de tous mes sens. Oh ! Que la terre  
est belle !  
— Paul Fort

私は山に登った——私は天界から眺め下す。  
地と太陽とは同じき祖國だ、しかし地上は  
わが狂喜の匂はしき對象だ、わが感覺の赴  
くところ、あゝ何ぞ地上の美はしき！

——ポオル・フオール

律

I

## 律

われは心惱む、われは心惹かれる、われは  
 夢みながらに金の駿馬を  
 幻の境より引き入れる。  
 われは鞭ちわれは足掻き、われの歩みと彼  
 の歩みを、轡の音と拍車の響を、鈴の音

律

と焦立つ吐息を、波うつ心と奔れる足並  
 を。  
 踏みしめ、合はしめ、なほも夢み、  
 浩蕩たる大海の碧の底へ、  
 波うち沫く闇の岩窟へ、  
 さてまた微かに消えゆく反響のごとく  
 樹立のかなたに水影爽やかな夜の湖  
 蘆の枯葉に戦げる風と黙しうつらふ。

われは童女の心を、

律

われは感じ敏き指先を

快き驚きを、

驚きの快樂を、

木の實の澤にむつみ輝くはげしさを

いつも新に、いつも輝き、いつも夢むる

『生』を、その種子を、不可思議の三昧境を、

恍惚の肉感を、堪へえざる歡喜の源を、

われはのぞむ、われは押し流し、われはか

弱き手をば盲目のごとくにさし伸べて

なほも求む、なほもきけり、なほも踊れり、

山を、谷間を、岩のあひだを、苦しく堰か  
るゝ小川のごとくに  
海へ、海へと。

翼は焔に焼かれはてゝ渦潮高い青海原に落  
ち込んだ。救ひを願ふな、もはや聲なき  
大海の一滴。弱い力が常劫の運命へと流  
された。

われは悲み、われは悶き、われは苦しき牢  
獄を夢と地上にかいまみる。

律



律

されど切なき欲望は惱みに燃えて立ち昂り、  
 復び空へ、闇黒の空へと赤き炬火を打ち振  
 ふ。

あゝ、いつも嘶き高き金の駿馬よ、  
 心の底に燃え狂ふ欲念の火を忘れざれ、  
 鮮やかに掴む腕を失はざれ。  
 欲するがまゝなるものをその儘の力に任し、  
 智慧と啓示を自らなる輝きに見出でしめよ。  
 われは熱き唇をもちしとき、その接吻は甘

律

かりき、――  
 隠れたる地上の生命を。  
 汚されたるまことの淫樂を  
 心ゆくまで飲みしめて杳かなる光り滴る蒼  
 空へ  
 飛びゆけよ、飛びゆけよ、わが胸の  
 一つの絲、一つの響よ。

愛

II

愛

息をひそめて嵐のうちに  
 すべてのももの飛び去るなかに  
 われを地に就かしむるものを思へよ、  
 樹にすがる蔦のごとく  
 吾は執ねくも手をさしのべ

愛

あらゆるもの凍る夜半に  
 空に昇りゆく焔を、  
 その強き足音を  
 わが脈管のなかに聴く――  
 われはあらゆる樹木のごとく  
 地のうへに立てり。  
 あゝわれは枝を張り  
 その根は深き底に喰ひ入る、  
 吾を盡はすもの地の下にありて

愛

限りなき愉悅と力とをおくる。  
 吾は乞食のごとく地にひれ伏し  
 その齒は強き心臓をも嚙むべく  
 吾を狂はす血の在所をば突きとめむ。  
 そこに全身蓋ふものもなき裸體の女、  
 恍惚と肉感の愉樂に溺れ、  
 ほの紅む腕をば緑なす海底に  
 夜の星の如き涼しき瞳は髪のかげに  
 萬人の瞳を聚む。

吾は古の CENTAURS

野山に角の響充つれば  
 丘をこえ、草を踏み、  
 酔へる人の足どりさながらに  
 熟せる木の實を手もて掴み、  
 快き嵐に浴みて  
 健かなる肉體を伸ばしえむ。

あゝされどまた夜きたりて  
 わが靈は幻のごとく

愛

谷間の墓によろめきかゝり、  
 裂かれたる枝の上に  
 雪は屍しかばねをあつめ來るとき、  
 何の力か、何の息か、  
 そこに潜むものもただえし夜を、  
 吾は曳かれ、吾はむなしく、  
 惱みのうへに血もてさみしく  
 わが腕かひなをばこまねかむ。――  
 しからざればたゞ手もて地つちをまさぐり、  
 盲人の指に世界を知るが如くに

かしこき智慧をそこに悟らむ。  
 われはかの星のごとく  
 または木の實の香りもどめて  
 かなたの森へと飛びゆく小鳥のごとく  
 流るゝ翼を大空へと  
 一すぢに走らしめむ。  
 よし空には果はかなき一點なりとも  
 黒くたしかなる存在をば  
 晴れわたる空に羽搏たしめむ。

愛

われはあらゆる樹木のごとく  
地のうへに立てり。

われはそこに嵐を持ち、

われは樂しき微風を夢む。

空に向ひて鳴りわたる木の葉よ、

ふかき底にひそめる根よ、

あゝ大地の愛を吸ひて

その脈管を太らせよ、

地は限りなきものゝうちに吾<sup>われ</sup>を

愛

空へと伸ばさしむる焔なれば。

想

III

想

序曲

泉は鳴る、泉は鳴る、  
 人知れぬ洞穴くわつちを潜つて  
 遠い緑の道  
 その果しなく煙る一線に

白く輝きわたる日の下に  
 泉は鳴る。

金の帆を上げよ、カづよく櫓をとれよ、  
 されど胸おごらして自みらを失ふな、  
 酔ひごゝちに  
 煙に包まれたる如くに  
 薫香かにまかれたる如くに  
 汝の船を走らせよ。

想

想

『吾』は吾に向つて語る、

『碎かれたる薔薇を眺むるより、

海にすてられたる花片を嗅がむより、

先づ路上に播かれたる種子たねを培つちかへ

種子を培ふ鋤をとれ』と

また『吾』は吾に向つて云ふ

『汝の心を燬けよ、鐵砧かねしきの上になぐけよ、

汝の拳を地に印するまで、

汝の脂あぶらを砂に滴らすまで、

煉金の味ひを靈に刻めよ』と。

想

焔は欲求の上に絶えず

心はかつて櫓をおす手の上に

もごかしき海洋を一すぢに渡らんとす、

かくて蒼ざめたる夜のごとくに

白き首かうべをたれては重き網もつなを

力盡きたる腕に捲きては歸る

漁夫の愚さをばまなぶなり。

金の帆を上げよ、力づよく櫓をとれよ、

想

酔ひごゝちに、  
 煙に包まれたる如くに、  
 薫香かうかうにまかれたる如くに、  
 汝の船を走らせよ。

I

想

わが欲するものは  
 暁の恍惚、華やかに眼覺めくる空と土、  
 噴泉の迸り、赤らむ樹木、――  
 木はその一葉一葉を  
 漲る精力で空に波だゝせ、  
 一めんに聚りくる光りを  
 光の尖端せんたんを



想

幹と樹皮と梢に浸透せしめ、  
かぎりなく變化に富む緑を  
大空へと捧げる、

おゝ大地よ、

健かで平和に充ちた大地よ

汝は果しもない強健な肉體を

永遠に静かな世界におく。

争亂の大地、紛擾の大地、憎惡と嫉妬と昏

迷の大地、

汝の上で人は國と國を争ひ

想

領域と領域の割讓を血と劔にかへる、  
闇黙の大地、静かで微笑もせぬ大地よ、魂  
の大地、聖者の大地よ、  
不滅な戦<sup>たかひ</sup>が汝を如何ように搖がすとも  
人の「愚かさ」が如何やうに汝を唆かすとも  
笑つてゐる大地よ、花の熾にひらく大地よ。

田園と都市と湖水と丘陵と  
かぎりなき反復の稜<sup>れう</sup>と廣袤<sup>くわうばう</sup>と  
幾何學的の建築と區劃と設計と

想

絶大な年月の上に積み重ねられた  
膂力と智識との文明、

あゝ大地よ、

おまへはそれらを載せて絶えず輝く、

白日の巨大なランプ、曉の薔薇

金を延べた田畑、匂ひに咽ぶ花園、

おまへは時に處女のごとく微笑し、

おまへはまた尼のごとくも沈黙する。

肉欲の大地、苦行と歡樂の大地、

PAN と BACCHUS との大地

そして また

APOLLON を讚美する大地、

吾は羊にしてまた駿馬の狂奔を知る妖獸、

吾はそこに新しき祭壇と燭を、

殿堂と墳墓を、

生々の緑と苦き灰色とを以て象る。

吾を打ちのめす「死」と「惡運」を、凶暴の魔女  
を、

その毒ある舌のために、刺ある痛みのため

想

想

に、

その陣痛と瘡とを、

わが靈の苦味として心臓に

強健な血と化して輸入する。

吾は大地の愛のために、

天上の愛を知る。

吾は地の骨をとつて

天上の礎とする。

われは悪魔を驅つて

天使の琴をかき鳴らす。

想

曉が目覺めた、曉が目覺めた。

地は一齋にその警鐘を亂打し、

太き動脈とあらゆる末梢の血管を

良き靈のために合奏する。

そこには永遠の若さ、——路上を盲ひながら

薄明と闇と貧困と

たえず苛み傷かれた魂が蒼ざめ乍らやつて

くる、

弱い手をのばしながら一人の若ものが

想

衰へた肺と燃えつきんとする心臓とを捧げ  
てやつてくる、

まだ路がある、まだ路がある、

汝の歩みそのものが若さだ、永遠を知る若

さだ、永遠の生命をもつ誇りだ。

汝を苦める貧困、パンの一片もあたへられ

ない貧困、

しかしながら汝の後に立つ「死」を齒噛みしな  
がら

汝の魂の祭壇を明るくしようとする手をも

つて格闘する

その闘ひが世界に幸福の種子を播く  
曙だ！

人間の詩の輝く刹那だ、大地と交接する

生きた思想だ、恍惚の管絃樂だ、

吾は嵐の暴力を含む――

その階音の一つ一つに随順する、――随順し  
うる

樹木だ、繁り合ふ木の葉の一つだ。

想

想

## II

焔を採れ、焼くがまゝの焔をどれ、  
 森を、山を、都市を、田園を  
 焼きつくす焔をどれ、汝の胸に。  
 熱愛がすべてだ、象の牙よりも強く  
 麦芽の醱酵よりも熾んなる  
 熱愛がすべてだ。  
 汝の胸に溢るゝ焔が  
 汝の製作を完成する、今あるごとく、

想

またまさに來らむとする苦熱の如く  
 頭を悩まし、腕を苦める  
 偉大な創造よ、汝の詩よ、  
 焔のまゝに溶け入れよ、自らなる光を放て  
 よ、  
 溶爐に散る火花の如く、重く、執ねく  
 汝の思想をそのまゝに響となせ、音階とな  
 せ、  
 吾に求むるものは樂人の心、人生の作曲家、  
 また聲調を調律し整齊する

想

静思と技巧の彫塑家、——あらゆる面と量と

容積とに

辭句を安泰ならしめる技術家、

されど計るなかれ、數量する勿れ、

汝の精神を鑄型に入れて琢く勿れ、

たゞに驚異を望むなかれ、また精製をのみ

求むる勿れ、

吾が熱愛があらゆる調和を生む、——偏るな

き自然の姿を生む、自らなる静謐を生む。

大地に生へた生へぬきの樹木

想

その上に鳴る嵐、その上に飛ぶ小鳥、

吾は土塗れに働く耕人の如く

わが血の流れそゞぐ土壤の一塊を

詩の最上の祭壇に投げつける、

人生讃賞、地上の頌歌、永遠の詩歌、

そして、貧しき一人の人間！

詩人

## 詩人

すべてのものはうたへるなり、  
 聲をはなちてうたへるなり、  
 われこの幸をきみに願つに  
 たゞ貧しくして裸體なり。

## ヴェルアランの死に

血塗れの白耳義ベールギよ、痛ましき世紀の上に  
 おんみは至上の詩をば植ゑつたり。  
 またと咲かざる花をば、おゝ詩人よ、  
 君は弗羅曼フロマンの野邊より世界に驢けせり。

千九百十六年十一月廿七日  
 一アンより巴里への歸途鐵路  
 に觸れて無慘の最後を遂げし  
 さいふ報せなきし日

ヴェルアランの死に

O mon âme, il ne faut concevoir aucun plan !

—Paul Claudel

おゝわが心よ、何らの企畫に許る勿れ！

—ポール・クロオデル

風物と吾



A Cosmos am I.

— Walt Whitman

吾は宇宙だ

— ウォルト・ホイットマン

## 風物と吾

周囲は私にとつて

絶えず歌を唱ふ楽器です、

山、樹木、湖水、さうして限りない海

海のはてにつづく雲、天空、

みどりの寶玉を一せいに撒き散らした

あの夜の奥深い蒼穹、

そこにおのづからなる歌が湧き、琴が亂れ、

## 風物と音

千萬年も絶えないランプが燃える……  
 夜の星と月と、  
 さうしてかすかぎりない響がもつれ、  
 かすかぎりない歌がうたはれる、  
 風に、風につれて動くもの音に  
 または何の音もない空間が  
 静かな時の流れに身をよせかけ  
 わたしの心と脈膊を合はすとき  
 わたしはたゞひとりの私でない、  
 わたしは風そのものであり、

わたしは輝く四邊であり、  
 さうして周圍とともに舞踏する  
 一つの生きもの、一つの感覺、一つの大き  
 な靈<sup>たましい</sup>

私は角<sup>かど</sup>を吹く牧羊神<sup>ぼくやうじん</sup>の  
 危げな足ごりに舞ひつれて  
 かぎりない酒瓶に一ぱいの  
 琥珀の酒をなみなみと覆<sup>くつがへ</sup>す、  
 盃になほ足りず、喉<sup>のど</sup>の中になほ足りず、

## 風物と音

胸のなかになほ充ちたらぬ酒の香りの  
やがて一つの靈を酔はすまで。

酔ひしきらすまで。

——私は歌ひつれる、私はをどりしきる、  
けれども、けれども

私はなほ酔ひきらぬ一つの眼をもつて  
蹠蹴く足を周圍の棚におく。

わたしの心は燃えてゐる、

酒精と情慾とかぎりない獲得心と

洗はれた靈と、少女の如き熱望と

あゝわたしはそれらのために充たされ、

それらの力によつて心を動かし、

それらの動きに従つて與へられ、

たゞ吾を充たすことによつて吾を空しくし、

吾を空しくすることによつてふたゞび惠ま  
れる。

けれども、けれども、

わたし自らをながめる一つの眼は

不幸にもわたしの周圍を

## 風物と吾

わたしと二つのものに分離する。

わたしの目を盲ひさせよ、

わたしは見えぬ眼によつて眺めえられる、

——一つの世界を。

けれども

風物はわたしの中にかすかぎりなき、

まことにかすかぎりない光りと熱さを以て

吾をそのなかに吸収する。

われはそのなかにあつて籬罌粟の優しき匂

## ひと、

成熟した果物の樹を落ちる匂ひとを嗅ぐ。

わたしは情人のこまやかな息を肌の熱さを、

手をかけて口を吸ふ肉感を、

わゝわたしの靈のなかに不可思議な

交媾の恍惚を明るく清浄に

聖者の口をからずして眼のあたり

周囲の香氣のなかに見ゆる。

わたしは沈黙の種子が吾を躍らし

吾をかしこに導くを知る。

## 風物と吾

## 風物と音

わたしは自然の樂手である、  
 わたしが歌口に歌を吹きこみ、  
 わたしのまことに舞ひつれるとき、  
 わたしは四邊の吸盤に  
 その足ごりのすべてを指揮される、  
 わたしはわたしの息によつて  
 樹木の梢にらんまんたる  
 花のかつやきをあつめえられる。  
 慧しき眼よ、盲れるな、  
 慧しき心よ、たゆむな、

## 風物と音

そこに湧きいでる焔に  
 おまへみづからを見出すまで。

颱風

## 颱風

無際限の空におこる暴力、

本然の暴力、

思ふがまゝに實行する力の權威、

原始の蠻性、

颱風！ 颱風！

巨人の手先にあしらふ侏儒のごとく

さながら都會は汝の下に引き倒さる。

颱風！ 颱風！

汝は忘れられたる自然の暴慢を

鮮やかにわれらの前に繰り返へす。

積み重ねられた人間の智慧を

一たまりもなく蹴散らす。

まして紙片にも似た危い建設の都市、

貧しい部落の連続からなる東京、

汝の巨手にはあまりに力なき抵抗である、

猛獸の前に横はる昆蟲の一匹、

颱風

## 颯風

砂上につくられた文化の儚さ！

手ひごく打ちのめされた都市よ、

壊滅された市街よ、自然よ、

もの憐れな棺の列が限りなく続いてゆく、

白日に照らされた溝渠ほりわりの濁つた水底みなぞこから、

いくつとなく掘りかへされる屍しかばね——

それらは報ひらるべき罪業と悲運との、

悪業と背徳との

何ものにもかゝはらぬ一つの偶然、理智も

## 聰明も、

あゝ自然の畏をのがるゝ瞬間の

動物らしい敏捷を失つた悲しさ——

裸體となつた人間の無力である。

信仰も叡智も剝ぎとられた、

衣服も家も剝ぎとられた

人間の無力、悲哀。

底の知れない自然に向つて

坑をうがつ吾々の文化よ、

## 颯風

## 颯風

おし黙つた土地から、碧の空間から  
 吾らの幸福を織り出す文化よ、  
 はた、それらが啓示する力よ、命よ、  
 私はおまへの胸の上に耳をあて、  
 寢息を窺ふ盗人のごとくに  
 おまへの祕密を盗み出す、  
 けれどもその上に要求するものは  
 なほも底知れぬ本然の力——  
 あゝ、おまへの胸にある血液、おまへの胸  
 に動く鼓動である。——

湧きいでる宛らの力の  
 源である。

颯風！ 颯風！

真夜中の眠りから覺まして

吾を恐怖のなかに投げ出した

颯風！

おまへの吹きすぎる大軍のなかに、  
 世界を被ひつくす巨大な管絃樂のそのなか  
 に、

## 颯風



## 颱風

吾々を地上から躍らして  
 血みごろの戦ひのなかに挽ぎ取る、  
 格闘しても挽ぎ取る、  
 もぎ取らなければならぬ  
 一つの勝標がある。  
 あゝ、空は吾らの夢をかき昏らし、  
 死と苦惱とはすべてを取り圍く。  
 けれども無惨にひき倒される  
 不可抗な力の中心に向つて、  
 光り輝いた力の中心に向つて、

わが靈は躍り上る。

颱風！ 颱風！ 『未來』の海に吹き荒れる  
 力のまゝなる颱風！

わたしは眞夜中の恐怖から立ちあがり、  
 折り亂される樹木の梢に、  
 おまへの吹きすぎる足下に  
 祈念の焔を赤々と燃え立たす——  
 『吾にあたへよ、力を、力の源を』と。  
 吾はそこに吾の贏ち得る

## 颱風

## 颯風

たゞひとつの曉をば待ちのぞみ、  
 吾を彼方とひたむきに進ます  
 血ぞめの旗風を身に浴びる。  
 あゝ、その亂れ慄く屍の都市に、  
 その蒼ざめた棺に、  
 白々と輝きわたる平和な朝の日光！  
 その碧の空の光りを  
 豊かな飽満を、  
 あゝ、汝の吹き荒るゝ力の上に  
 吾は待ちのぞむ。

## 颯風

(大正六年九月卅日夜東京を襲ひ  
 し颯風の吹き荒れしあきにて)

過ぎゆくもの「生」

## 過ぎゆくもの「生」

昨日きのうの日をながめよ、今日けふは屍骸ひくろとなつた

昨日きのうの日をながめよ。

過ぎ去る亡霊の影とうつる

昨日きのうの日をながめよ。

運命のおかしくも織りなしてゆく

縷れの青ざめた昨日きのうの日をながめよ。

「昨日」はわたしを捉へた。「昨日」はわたしを  
苛んだ。

「昨日」はわたしを蹂躪ふみにじつた。

わたしは力ない腕をふるつて

むらがる悪鬼と争闘した。

わたしは湧きおこる力を豫想して

「昨日」の扉を押しやつた。

わたしは不可抗な「時」を友にして

いま、「今日」の扉をたたく。

過ぎゆくもの「生」

## 過ぎゆくもの「生」

「今日」はわたしにとつて永遠である、  
 「今日」はわたしの慕はしい戀人、  
 「今日」はわたしの愛しい妻、さうして  
 「今日」はわたしの力の源である神、  
 あゝ、その祭壇には熾んな情慾がもえたち  
 焔はあらゆる供物を生々の色に彩る。  
 「今日」は來らむとする翼をとらへ、  
 「今日」は遠き未來を打ちこぼつ。  
 わたしの禮讚はわが皮膚の細胞に  
 花と亂れる情慾の讚歌、

あゝ、偉大な本然ほんねんに根ざす力の動きに  
 わたしは車輪の一片となつて  
 その壯大な堂宇をかけめぐる。

わたしは「昨日」を葬る、やさしい言葉もかけ  
 ず。

わたしは合掌する、わたしの燃え立つ魂に。  
 わたしは瞑黙する、静かな夜にもきこえる  
 鼓動に。

わたしは火をかげる、わたしの心の隅々

## 過ぎゆくもの「生」

過ぎゆくもの「生」

を明るくするため。

わたしは歌ふ、大声を張りあげてわが心の  
動くがまゝを言葉と響にして。

あゝ過ぎゆくものゝ一切、わが前を消えさ  
るものゝ一切、

われはそのためにも嘆かず、わが愛撫の心を  
生き動くものゝ上にとさし向ける、

わたしは一切の死滅を幻と信じて  
うつりゆく「時」の胎内にわが生をさゝげる。

## 満腹

あらい蹄で土を蹴る PAN

野蠻な笛が空にうめく。

おゝ、ひたむきに走れ、

おまへの苦痛に渦を巻いて

ひたむきに走れ。

おまへは打ち撻つもの、

悔ゆるな、嘆くな、

満腹

## 満腹

おまへは盗みとるもの、  
 幸福のためには  
 地上を血で洗ふもの。  
 さあ、刈りとられた草原の上に  
 血まみれの食卓がある。  
 その御馳走は「苦惱」  
 食へ、掴め、満腹しろ、  
 苦い味ひが魂に薬だ。  
 苦惱を食へ、食つて終へ、さうして肥れ。  
 空には野蠻な笛がひびく。

## 満腹

おまへの樂慾を煽りたすために。  
 おまへを奮ひ立たすために。  
 おまへを打ち撻たすために。

## 孤獨の夜の祈禱

われは夢みながらにこの苦痛をかむ。

われは身をかゝめて苦惱のなかに

ひとりの路をゆく。

孤獨、偉大なる孤獨よ、

吾はその洞穴にあつて

靈の日に夜に瘦せ細るを見まもる、

燃えながら、狂ひながら、喘ぎながら

止むことなき力の羽搏きを見守る。

吾を苛む針はあらゆる衣ころもを突き刺し

むざむざに裸體として凍るばかりの夜の地  
に

たゞひとり投げいだす。――

何ものも觸さばるな、訪れるな、口をきくな、

試練こそ至上のおくりもの、

孤獨こそ至上の愛、

荒れはてた土壤を割つてさしのばす

緑の草の芽の如くにわたしの心は

## 孤獨の夜の祈禱

この暗の夜にも顫へてゐる。

おとづれきたるものは吾を苛むものゝ聲、

嵐と、海の響と、嘲笑の雨と、飢と……

自らの卑少を蔑む笑と、自責の鞭と、

あゝ、心は泣くごとくに呟くものゝ傍に

たゞ唇を噛みしめては意向に祈る、祈る、――

されど、わが祈禱は心の平安をえんためならず、

わが祈禱は嵐より逃れんためならず、

## 孤獨の夜の祈禱

吾は恐怖のたゞなかにも身慄ふまで浸つて  
おびえる心をすぐやかに正さんため、  
憎みも愛もその扉をどちて  
おごそかな沈黙こそ四邊を領するなかに  
たゞひとり寂やかな心をのぞむため、  
あらゆるものゝなかに行くときもたゞひと  
つ

不動の信仰を身にもたんため、

おのづからなる智慧と力をもたんため、

われは祈る、祈る、ひたむきに地にひれ伏



## 孤獨の夜の祈禱

して、

瘦せ細る腕かひなのうへにやがて滴る

蒼白い曙の光りを待つ。

夜よ、祝福すべき夜よ、

ねがはくばおまへの闇を心ゆくまで吸はし  
め、おまへの乳を嬰兒あかごのごとくに飲ましめよ、嵐を羽うつてかける鵬おほとりの翼の

そのたゆみなき勇ましき心に孤りの路を、

## 孤獨の夜の祈禱

あゝ、たとへ撓み落つるとも

この願望をこそ煙りのごとく清淨に、  
輝く祭壇にゆかしめよ。

おゝ孤獨よ、祝福すべき孤獨よ、偉大なる

孤獨よ、おまへのみ、

われを鞭つて勝利の徑をゆかしめる、

まことの『吾みづから』とならじめる、

おゝ孤獨よ、おまへのみわが途上に

あらはれるすべてのものゝ生命いのちを

## 孤獨の夜の祈禱

はつきりとわが眼にうつし出す。

孤獨、孤獨、孤獨は最始にして最後の力、

吾をしておのおの、心に再生せしむる

唯一の力と愛。

われは苦惱を噛みつゝも感謝に充てる心を

もつて

おまへの祭壇にうなだれる。

## 解 脱

われらの周囲を

われらの中に見よう。

そは共々に呼吸する存在、

同じ「時」の寢床にねむりまた起きて

再びおなじ朝をむかへる二人。

あゝわれらの和解の言葉は分有、

解 脱

二つの心をひとつにもつこと。  
 ともどもに一つの心を分け合ふこと。  
 されば果しない争ひの饒舌を  
 たゞ沈黙のなかに流して終はう。

われらの土のうへには  
 ときじくの木の実香はしく匂ひをはなつ。  
 あゝ、飛ばんとする心よ、先づ土に歸れ、  
 蒼空は大なる環をなして  
 地上に折れ込む。

焔はゆるやかに世界をあたゝめ、  
 永遠の太陽はおまへの血のなかにも住む。  
 われ自らを掘りさげよ、泉を見んためには。  
 われ自らを砕けよ、愛を知らむためには。  
 われ自らの分子に、わが切ない言葉をかけ  
 よ。

苦惱にゆだねよ——苦惱を呑むためには。  
 「生」は赤らむ遊泳者の胸の如く泡沫に濡れ  
 て

解脱

恐ろしき波のうねりのなかに漂ふ。  
 あゝ泳げよ、そのうねりのまゝに。  
 われらの地上の黎明は  
 われらが惱む沈黙のなかに生れる！

あゝ、われは力をこめて壓搾する暗き葡萄  
 の房

そのはじけ上る粒の滴りに新鮮な  
 生の酒を味はう。  
 われらの縛めをほごかむものは。

解脱

至上の幸福に酔はむものは、

死

## 死

「死」がこゝにゐたなら  
しつかりと「生」を握らう——  
おまへにとられないために。

「死」がむかうにゐたなら  
じつとして話しをしてみよう——  
鏡にうつる姿と話しをするやうに。

死

「死」がしづかにやつてきたら、  
快く眠らう、たつたひとりで——  
ちがった朝をむかへるために。

## 經驗

世にも美しくしいひとりの女、  
 わたしを悩ましたひとりの女、  
 傷けたひとりの女、その胸に  
 いまよろこびの涙をながす――  
 失ひしゆゑ、ふたゝび得たれば。

## 和絃

わたしはあたへられた「時」のなかに  
 ひとりで歩む。  
 わたしはあたへられた楽器のなかで  
 出来るだけの音色を出す。  
 わたしの調べはわたしの心を怡ばすため、  
 そして、わたしの「生」をかなたへ、かなたへ  
 と進ますため、

## 和絃

またこの二つとない刹那を  
 幸福に膨らますため、  
 何の智巧たぐみもない手をもつて  
 たゞ夢みるまゝに搔き鳴らす。  
 わたしの生の和絃わごんはたゞ  
 わたしの熱によつて高まる！  
 惱みのなかに呻くセロの重い嵐も、  
 低い胡弓の咽び音も、  
 たゞ終極の調和に向つての不協和音、  
 悲しい律の亂れである。

## 和絃

わたしは素手すてをもつて  
 嵐のなかに飛び込む、  
 わたしは私にあたへられた「時」を  
 わたしの熱情で酔はさう。  
 わたしはさびしい運命に酒を飲み、  
 真赤な衣きものを着せて夕日の戸口に立たす。  
 夜はたゞ休息のため、  
 死は生を楽しくするため、

和絃

その不斷の進展を晝と闇とにわかつ。  
あゝ、わたしの上にも眠はあれ、休みはあ

れ、死はあれ、

しづかな花をもつて飾る墓はあれ、

碑銘の悲しい詩もあれ、

たゞ、わたしは病み蒼ざめた「疲勞」を眠ら  
し、

この生の曙を黄金色に彩らう。

わたしの心のなかに眠るものは

和絃

矛盾は一つの偶然、

宇宙の断片としての偶然、やがては

みな、その生きた口をひらいて歌ふ時がく  
る！

疲れぬ魂の幸を歌ふ日がある！

木の葉の微風にそよめく如く

五月の海の明るくほゝ笑むごとく――

わたしの微笑をひとびとの口もとへおくる  
日がくる！



巨大な調和の豎琴にはせ參じて  
 その夢をうち響かす一つの律。  
 善も悪も愛も憎みも、  
 われ自らのうちに闘ふ分子――  
 あゝ、吾らの争闘のなかにのみ  
 すべてを眺めるな、  
 調度器を狭い臺上におくな、  
 風がきて森をゆするごとく、  
 細い草の葉がさわやかに鳴るごとく、  
 そのひとつびとつせめぎも遠のけば快い

## 諧音！

大きな管絃樂の嵐とうちかはる。

琴をおまへの胸におけよ、

おまへの音色をおまへの指で奏かなでよ、  
 手をも觸れずば永遠に響かぬ糸――  
 その沈黙の語る言葉を  
 明らかにうたひいでよ。

わたしは「生」の戸口で

和絃

いつも倒れる、  
 わたしは弱い脚なみで  
 険しい道をゆく。  
 けれども彼方の丘こそわたしの歩の中にあ  
 る。

彼方を此方にひきよせるものこそ  
 わたしの靈の若さにある。  
 光の空をうちみるものこそ  
 さびしい夜の山上に立つ。

和絃

生きること、生きること、生き切ること、  
 うち克つために悩むこと、悩み切ること、  
 歓びのために嘆くこと、嘆き切ること、  
 その教へをこそ忘れるな。  
 そしていつも豊醇な生の香りを  
 熱い唇に貪り食ふことを忘れるな。  
 鳴りひたく嵐の和絃のたゞ中に。――

愛のおくりもの

愛のおくりもの

わたしの愛は鳥の羽搏き、  
 はるかな波のうへの泡、——  
 蒼海のふかいうねりの底から  
 たえず頭をもたげる気泡、  
 日にかゝやく白鳥の翼、  
 たえず時を羽搏ちながら  
 たえず悩みに染まる

火の色唇。

戀人よ。

わたしはいつもあなたの掌のなかに  
 つよい烙印をあたへる、

戀人よ、

わたしはいつもあなたの唇に  
 釘づけの詩をかく。

それはあらしのなかにも  
 消されぬ灯をかかげんため、

愛のおくりもの

愛のおくりもの

戀びとよ、

あなたをわたしの心から死なしめぬため、  
燃えしきる力をあなたから出さすため、

あゝ、わたしはいつも

苦にがいおくりものをする。

春  
の  
頌

Le ciel est gai, C'est joli Mai.

— Paul Fort

空は愉快だ、  
怡しい五月、

ポール・フォール

## I 序 曲

風はさみしき土から生れ  
暗い道をとほる、

風は孤りの心に生れ  
ひとりの姿でゆく。

風は草の實のひとつを妊ませ

序 曲

序曲

たくさんな花をさかす。

風はしづかな足ざりでゆき過ぎ  
賑やかな舞踏をする。

風は見えぬ花のひとつにも口ぶれ、  
顛へる蔓のひとつとも握手する。

風はうたひつれ言葉を交はす、  
おのが歌と世界を調子に合はす。

序曲

風はひときわたり、ひときわたり、曙へと、  
朝へと、正午へとすゝみゆく。

風景

## II 風景

おし静まつた土から  
ひゞきわれる芽の音！  
石竹色の空。

緑の柔軟な皮膚  
赤らんだ乳房の山  
女性のしなやかさに技はのび、草はのびる、

風景

そして、その下に  
男の腕がある——  
强健な、太い男の腕、  
力一ぱいに土をさゝえるテシウスの腕。

虹とかトやく空氣、  
玻璃盤の周圍のきらめき、  
太陽は嬰兒のやうに笑ふ、歌ふ、  
そして、  
萬物を太鼓のやうにたたく。

## 風景

千差萬別の感覺で、  
一つに聚る韻律で。

おし黙つた静かな土から  
ひゞき割れる芽の音！

春はじつと怵へた胸で  
可笑しさうに笑ふ。

## III 夜の歌

夜はもの静かに坐る、夜は名も知らぬ客  
人の姿をしてわたしのかたへに坐る、しか  
しその手は温い。

窓をとざした外をとりまく五月、甘美の  
季節、あゝ遠くで山査子の散る匂ひがする。  
麝金香の幽かにひらく音がする。たくさん

夜の歌



## 夜の歌

の處女が心で愛人を夢みる匂ひがする。夜  
は見知らぬ客人のやうに傍かたへにすはる。しか  
しその手は温い。

「おゝ、見知らぬ客人よ」とわたしはひそか  
に呼ぶ。夜はしづかな掌をわたしの胸のな  
かでひらく。すべてが沈黙のなかに吸ひ込  
まれた空虚な世界、そのなかでわたしの心  
は嬰兒あかごのやうに眼をさます。わたしは音も  
ない沈黙の手に自分をゆだねる、母にゆだ

ねる嬰兒あかごのやうに。

夜はもの静かに坐る。しかしその手は温  
い。あゝ、いつのまにかわたしはその客人  
と話をしてゐた。わたしはやがてその手を  
とつて外そとの秘密をきかうとした。窓の外に  
五月は女の髪の毛のやうに匂はしい。

あゝ、わたしは切なくその匂ひをかぐ、  
わたしは春情もろこころづいた子供のやうにしきりに

## 夜の歌

## 夜の歌

胸をさはがせてあこがれる。憧憬<sup>きざね</sup>の心の秘密をさぐらうと「夜」に訊く。しかし夜は黙つて答へない。

おゝ、五月、五月、甘美の季節、しなやかな裸體の線の誘惑に吾をおぼらす五月、わが息をはづませ、わが思ひを切<sup>せつ</sup>なくする五月、春情をそゝらせる五月、樹皮の液汁を滴らす五月、すべてのものゝ胎<sup>はら</sup>である懐妊の五月、微風の五月、溶けてくづれる微

## 夜の歌

笑の五月、女の五月、男の五月、——あゝその秘密を夜<sup>よる</sup>は語らない五月、しかしわたしはたい切なく酔はうとする。……

寂しい焦燥

## IV 寂しい焦燥

窓の外そとに五月がきてゐる、  
 青きい着きものを着て。……  
 しかしわたしの窓は今夜は淋しい、  
 花一つおいてない、  
 青きい窓掛まがひがかたく垂れて  
 わたしの息をどちこめる。

寂しい焦燥

窓のそとに五月がきてゐる、  
 青きい着きものをきて。……  
 しかしわたしの手はその窓をひきあけて  
 彼かの女ぢよを呼びこむためには  
 あまりに節せつが固かたすぎる、  
 あゝ、暗くらい今夜、かすかな雨がふる……  
 窓のそとには、五月が  
 青きい着きものをきて待つてゐる。

## V 春の愛

春はしんじゆんと滲みとほる、  
 やはらかな雨は土をなだめる、  
 心の甘さで男をひきしめる女のやうに。

春は女の愛、男の愛、またすべての愛、  
 春はすべてを抱擁し、  
 そのからみつく腕かひなのなかに

不可思議な種子たねをたくさん播く。

おゝ、ゆるやかでしなやかな春の掌たなでこ、  
 そこからこぼれ落ちる「微笑」の種子！「愛」の  
 種子たね！

かすかな護謨の弾力をもつて  
 人をそゝる「性」の種子！

おゝ、伸び伸びと伸びよ、弱くとも、  
 なつかしく豊かな情慾の波に――  
 いたいけな汝おまへの心よ、

春の愛

春はちひさな草の芽にすら  
ほこらしい生活をあたへる！

VI かるい五月

五月、五月、五月、

あたりは花園のやうに明るく  
一めんの匂ひに充ちてゐる。  
わたしをとりまくこの空間を  
どこまでも、どこまでも泳いでゆきたいや  
うな

ほんとに爽やかでかるい空気が、

かるい五月

かるい五月

その空気の手觸りは  
わたしをまつたくの動物にかへらし、  
ひとつびとつの官能に  
新しい快感をあたへる。

風は快い微笑をうちまけて、  
花圃はなぼたけの草花をかたつばしから  
本の頁ぺいじをめくるやうにひらかす——  
鬱金香ちりつぽう、罌粟けし、ひなげし、あねもおん、  
すこし媚こひをおくるやうに、ときをりは

處女の脛はざをもるんりよなく露あははにする  
そよかせ、そよかせ、素足すあしの微風そよかぜ、  
この青空のまつ下したで  
五月の饗宴けいげんになくはならない  
若ものゝ心には戀の酒をつぐ。

あゝ五月、五月、五月、  
なんど繰り返してもいゝその歌を  
また今年ことしも新しく歌ふがいゝ、  
にぎつて放さない握手を

かるい五月

かるい五月

しつかりとお互の胸におくがいろ。  
影までも匂はしく香る薄暮なごらに  
すこしの悔もないまでに。

## VII 夜 曲

春の夜よるは鋭い汽車の笛さへ  
圓みを帯びてきこえる。  
ごごとも知れぬちひさな囁きが  
あたりの甘い霧のなかへおとづれ、  
睡りに落ちた小鳥の羽搏はたきさへ  
あきららかにきこられる——公園の夜道、  
寄り添った二つの影が

夜 曲

## 夜曲

世にまたとない親しさと美しさで  
しづかにわたしの前をとほる。

わたしは二人の甘い言葉を

その躍る胸の鼓動を、熱い手の脈搏を  
しつかりときいてゐた。

悩みも、よろこびも、

溶け合つた夢の路にはたゞひとつ、

そのしづかな幸福の小徑を

わたしもいくたびか歩いた。

## 夜曲

夜の幸ひよ、春の歎びよ、

消えさる瞬間を一あし、一あし、

おまへの息で匂はしくするため、

おまへの醗酔で桃色に染めるため、

あゝ、この夜霧の

深い朧ろな魅はしのなかに

なにもかも忘れて歩め。

花の音もなくひらくやうに

ごもごもの胸の幸福をそのまゝ



夜曲

しつかりと抱くがいゝ。

春の夜は鋭い汽車の笛さへ  
圓みをおびてきこえる。……

## VIII 生は春にあり

湧きいでる、湧きいでる、湧きいでるもの  
こそ不可思議風はにほひなきところにも匂ひをおくり、  
地のあらゆる力をおのづからに燃えたゝす。  
おゝ生いのちこそ不可思議、いま在るものこそ不  
可思議、生れいづるものこそ不可思議！  
河の岸邊に「春」はその足ごりを亂して

生は春にあり

生は春にあり

快い素足に青草のはつくとした根元を踏む。

蛙は起きあがり、蝸牛は角をのし、ひとしく大きな空の下に呼吸する、

湧きいでる、湧きいでる、湧きいでるものこそ不可思議。

あゝ、わたしはそのむかし情慾の嵐に  
 こともなく齎されたひとつの草の種子――  
 あゝ、そのこともない戯れを祝福しよう、  
 日の下で

そのおのづからなる嵐に呼吸づく  
 ひとつの力を讚美しよう。

湧きいでる、湧きいでる、湧きいでるもの  
 こそ不可思議。

おりおりにはためく風の戦ぎに光はみだれ  
 燃え立つ陽炎のなかにふともさし入る草の  
 陰影――

おゝ、たとへ、そのごとく死はおとづれ來  
 るとも恐れるな、

おまへをやさしくなだめる微風のなかにあ

生は春にあり

生は春にあり

つて

おまへの呼吸を波うたせ、お前の唇を燃え  
たせよ。

湧きいでる、湧きいでる、湧きいでるもの

こそ不可思議。

あゝ生こそまことの不可思議、知りえぬも  
のゝ力、

春の川の岸邊に生ひたつ草の實の如く

少くも膨れあがつた魂の幸ひよ、

わたしはあらゆる陰影を追ひやる、熱に火

照る手をもつて

あゝわたしは心の中の汚染のやうな黒點を  
この光のなかに消滅さす。

生は春にあり

戀

## IX 戀

わたしは孤獨のなかにゐて、  
 孤獨の壁にうつるおまへを見てゐる、  
 わたしの幸福は爪を立て、  
 その壁を這ひのぼる。——たしかな「おまへ」を  
 わたしの心の中に所有するため。

おゝ戀よ——

おゝ戀よ——

戀

もう疑ひぶかい心を解いて  
 たゞおまへの胸の鼓動をきいてゐやう。  
 わたしの脈とおまへの脈とが  
 てうごよい調子をうつつのを……  
 それから、おまへの眼が私のさびしい顔を  
 うつつして  
 濕んだなかに湖みづうみのやうに輝くのを。

戀

わたしは淋しいひとりの世界に  
 おまへを見つけた。  
 けれどもおまへの姿のうらには  
 自分の幸福を裏切る「憎み」がすんで、  
 たえず私をおびやかしてゐた。  
 おまへを愛すれば愛するほど、  
 おまへを殺す<sup>は</sup>ものと、自分を傷ける「恥辱」  
 とがいつも苦しめた。

おゝ戀よ――

しかしおまへとわたしとを一つの燐に燃え  
 たゝす

よい瞬間が二人にきたのだ。  
 二人は苦しみのなかゝら手をのばして  
 雑草のなかゝら莖をさしのべる薊のやうに  
 燃え切った力で新しい世界に  
 おのおのゝ芽をさし出した。

戀

戀  
おゝ戀よ——

日光にまみれた輝かしいからだ體で  
強い接吻をしつかりした。

ともどもの生を裏切ると思つた慾望が  
ともどもの胸の中に生きた。

孤獨のなかに爪をたてゝ

なほも敏感に觸角をはたらかす、

戀よ——

熾んな日光の陶醉で、

戀

なほも酸酵する生よ、——不可思議の……  
おゝ戀よ——

白晝の哄笑

## Ⅹ 白晝の哄笑

大氣は玲瓏とした室をつくり  
 太陽はすべてを寶玉にする、  
 空中に光る微分子  
 あゝ、塵さへも黄金のごとくに輝いてゐる、  
 こゝではすべてが神のもの、  
 すべてが朗らかな呼吸のなか、  
 おまへの心もこの大氣のなかで

白晝の哄笑

光りの一片と化しされよ。  
 光る、光る、光る、あらゆるものゝ本然、  
 心の臓が、血管が、障礙を破つて  
 葉脈の日光に露はなごとくに  
 光る、光る、光る、裸體の跳躍、  
 微笑と、勇ましい心と、自然な歩み——  
 澁面を去れよ、  
 眞面目くさい昂奮を去れよ、  
 それらは光りのなかであまりに可笑しく見  
 え、あまりにつけたいだ！

日本の畫廊

168

白晝の哄笑

むしろ笑へ、大きな聲で、怒鳴れ！  
おまへの怒鳴る彼處かしこに  
神もまた笑ふ。



色空故無數無量無邊。受行識  
空故無數無量無邊。

——摩訶般若波羅密經

## 雪舟

たゞ見るは煙る雲と、走り過ぎる水と、  
一沫の刷毛に描き出された山、動かぬ山、  
宛ら宇宙の意志が齎したかの如うに  
確かな線條は自然を心のまゝに約説する、  
素朴な黒汁の匂ひ、紙の上の不可思議な實  
在。

あゝ意力の畫家よ、精靈の畫家よ、  
君の前に自然は夢のごとくに解き放たれて  
また再び新たな自然を形ちづくる、  
緑の樹立も朱塗の樓門もたゞ薄墨の一刷毛、  
さうして實在の祕義に通じたやうな足どり  
で

杖をついた高僧は棧道をゆく。

めづらかな沈香が肉體を捉へるやうに

わたしは陶酔の世界に醒めてゐる、  
澄みわたる月の色の恍惚で。――  
あゝ鳴り響く力は音も出さず静かに  
暗い線と明るい紙のうへから  
わたしを確な世界へと導き入れる。

若冲

## 若冲

蛙がゐる、かたつむり蝸牛がゐる、かまきり蟋蟀がゐる、かまきり甲蟲がゐる、

大きな蓮の花は夢から覺めた女のやうに  
その紅らんだ肉體を水から浮き出して  
濃い緑青でつぶされた葉のうへに  
なやましげに莖をさしのべる……  
下には蛙がゐる、かたつむり蝸牛がゐる、また名も知

若冲

れぬ魚さかながゐる、水すましがゐる、  
そしてすべてが平和だ、圓滿だ、平等無差  
別の世界、

みんなおのおのが生きて、動いて、怡んで  
ゐる。

なんといふ謙讓で忠實まことやかな靈たましひであらう、  
なんといふ好ましい愛と深い觀察とで  
この地上の益めく小さな存在にも  
そのあふれる心を傾けつくしたことであら  
うか、

若冲

あゝ君のまへで名も知れぬ蟲は生きてゐる、  
 はじめて自分の権利をみとめられたやうに、  
 聲を立てゝ動いてゐる、  
 そしてひとつひとつの形はひとつひとつの  
 色をもつて

幸福な全宇宙を組み立てる

大きな調和の裝飾畫をこしらへる。

## 春 信

形態の畫家稀に見る整正と調和の  
 音樂のごとくに流れ出た女の四肢、  
 静な花のごとく、白い彫像の浮き出たご  
 とく、

豊かな圓みは快い線條に限られて

自然な靜謐と温味あたたかみとを加へる、

單音の線、さうしてあらゆる幻を閉ぢこめ

春 信

た

限りない調和の線、綜合の線、夢の線、  
 女は心のまゝの情思と淫蕩を  
 何のこだわりもない世界に投げ出して  
 その白い肉體を戀びとによせかける、  
 夢の線、美しい形態かたちを創り出す線、  
 さうして、そこでは五月の宵の静かな雨が  
 あらゆる人情の甘さを知らすやうに  
 薄青い戀の世界にふりかゝる。

春信、わが憧憬の畫家、春信、  
 線條の畫家、形態の畫家、音樂の畫家、  
 さうして静かな世界にあらゆる幻を閉ぢこ  
 めて  
 思ふがまゝの夢に遊ばす詩人の畫家、  
 春信、春信、春信。

光琳

## 光琳

金泥の土に豊かな春を思はす  
 紅梅の大輪、枝は一つの柏子の如く  
 自然に波うつてそのまゝの心を傳へる、  
 どこまでも限りなく流れた色彩の天地、  
 ときめく胸の鼓動のやうに、  
 湧き出る水はゆるやかに流れて  
 銀泥の波紋をるがく、傍では

紫の菖蒲ははつはつと呼吸をして  
 その匂やかな花と葉をさし伸べる。

花の畫家、樹木の畫家、それらの精靈を盗  
 んで

大きな曲調をくみ立てる作曲家、  
 限らない色彩の放蕩に寒い心を窒息さし、  
 自然の深さと飽くない悦びを大どかに歌ふ、  
 光琳——生のよろこびの歌ひ手。

光琳

歌麿

歌  
麿

なんといふ嬌態、なんといふ淫蕩、

なんといふ美への誘惑、なんといふ憎らし

い豊満な肉體、

歌麿の女は地上の罪惡を

みんな神のものにする、自由な美の世界に

おく。

遊樂が世界の全部、快い淫蕩の白い肌、

歌麿

黒髪と雛罌粟の蒼ほどの唇と、青い星の眸と、

あゝその眼は飽くない享樂に絶えず夢み、

果ては<sup>まぶた</sup>瞼に悲しみの隈どりさへ加はつて

堪へられぬ愉悅に睡つてゐる。

しなだれかゝる肉體は絶えず戀の思に燃え

て

紅らんだ牡丹の花のやうに

男の膝の上にくづれかゝる、

男は優しい瞳をなげて女の情思おもひのすべてを

そのなよやかな身体からだの中から掬みとる、  
 快樂に痺れるやうなその手足。  
 あゝ燃えたつ戀愛と生いのちの畫家、  
 女の畫家、あらゆる女の神祕をその肉体か  
 らとり出して  
 音樂のごとくに表はした畫家、「性」の畫家、  
 歌麿の女は惡魔のやうな媚をもつて  
 靈たましいを肉の前にて噓啼り泣かす。

## 鳥羽僧正

これは高臺寺の野狐のぎつねごの  
 ようこそござつた、この月の夜に  
 芒のかげからひよいと公達きんたちに化けた  
 狩衣かりぎぬに烏帽子姿もよく似合ひまする。  
 だが、その後ろの尻尾が  
 そなたを慕ふ姫君に觀破されたら  
 何となさります……



鳥羽僧正

これは世にも名高い戯畫、鳥獸繪卷、  
 これは世にも稀なお伽繪草紙、  
 だが、その軽い毛筆のせゝら笑ひは  
 いまの世のわたしたちにも  
 めづらかな怡びを誘ひます。

世界はまこと永遠の悲喜劇、  
 涙のビエロオが月の夜に吹き鳴らす笛の音  
 その道化芝居のいくさを

いつまで立つても繰りかへす人間の馬鹿。

漫畫家鳥羽僧正は

その愚かな靈を心ゆくまで  
 涙をもつて歌ひなされた詩人、  
 ユモレスクの小唄作者。

鳥羽僧正

## 山樂

たゞ熱情のみ世を統しめす、  
たゞ意力のみ世を蓋ふ。

絶世の巨人わが豊太閤よ。力と華やぐ裝飾  
の桃山よ、  
かつてなき偉大なる時代よ。

夢は曉には消え去るもの、

花は土に落ちて朽ちゆくもの、  
されどその消え去る悲しみをば  
徒らに嘆くこそ愚かの教へ、價なき理、  
ひとは夢を知りて夢に生くることこそいの  
ち、

波うつて絶えざるその胸の鼓動を  
刹那に刻みつゝ永遠に渡すものこそ巨人、  
おゝ壯麗の意圖の時代、豪奢の桃山よ、  
わたしはおまへの剝落した畫廊の壁に  
その匂ひ高き英雄の夢を見る。

## 山樂

あゝ恵まれたる畫家の心——豊麗の色彩、  
 山樂の金の屏風は朽ちはてた色のなかゝら  
 今も生いづちに充ちて響き鳴る  
 英雄の心をわたしにあたへる。

## 廣重

好ましい版畫、  
 精緻で綺麗な錦繪、  
 雨に煙つた日本の松の美しさ  
 緑の芝山の向ふに  
 驚くばかりの紺青の海、  
 薄墨に曇る茅葺屋根、たくさんな白帆、  
 そして曙の黄金にかゞやく

廣重

いつも氣高い富士山、

CHARMANT JAPON!

不斷に恵まれた四季の自然の怡び、

廣重はいつも情趣のカメラに

生々しく自然を組み立てる。

自在な變化、すこしも淀みない觀察、

あらゆる複雑を統一する非凡の構圖。

幾何學と遠近法、和蘭の浮繪、

ウキスラアの心にマネの心に、

ゴングウルに、ゾラに

驚きの眼を見晴らした印象派畫家

——わたしにはたゞ素直に見える、

怡びに見える、さうして日本の自然の

正しい姿を見た最初の畫家に。——